

「生き物と共生する地域づくり」は市民の力が大きな原動力になる。そして市民には、人間と他の生き物のコミュニケーションをとる役割を果たすインタープリターが必要である。我々はこのような人のことをハ・トウェアーと呼びたい。

ハートウェアーの時代

心を持った人の時代

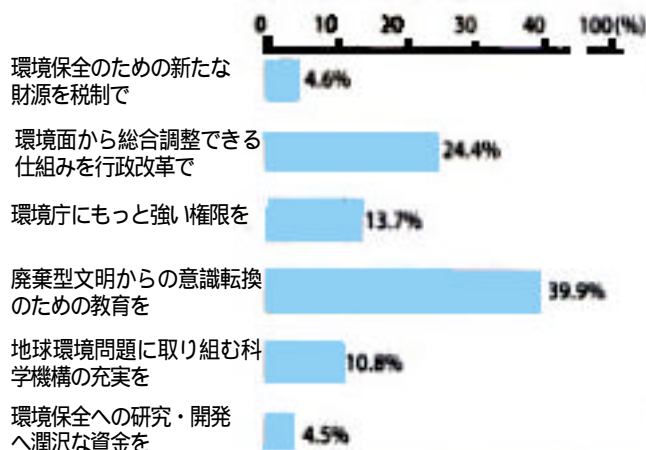
1997年の10大ニュースに間違えなく取り上げられるのが、神戸の児童殺人事件であろう。

事件の後、報道各紙にあるキーワードが登場した。それは『心の時代』『心の教育』といったものだ。中身はというと、余りにもごもつとも、あまりにも当たり前の意見である。裏返してみると、現代は、この当たり前の『心』を持った時代ではなく、『心』の通う教育もなされていないなかったということになるのだろうか…。

現在、大量生産、大量消費に支えられた『初めに物有りき』といったこれまでの価値観とは異なる方向性が必要であると言われている。事実、今年の春から夏にかけて行われた東京新聞の読者アンケートの結果¹を見ると、日本の今後の環境行政には何が必要かという質問に対し、「廃棄型文明からの意識転換のための教育を」という回答が約4割を占めトップであった。どうやら、人々はここに新しい方向性を求めているようだ。我々は、神戸の事件以前から、『心の時代』『心の教育』を渴望していたのだろう。

5年ほど前、私は当社の会社案内の冒頭に、「心を持った人の時代」というコメントを書かせてもらった。その主旨を簡単に述べると、「社会事象が複雑化する現在、この判断に当たって、もうマニュアルによる機械的対応には限界がある。これからは心を持った一人一人の人間が、自らの判断で対応することが求められる時代が来る」といったものである。このような方向性は、再現性の低い自然という事象を相手にしてきた当社においての、極めて必然的な帰結といえる。

日本の今後の環境行政には何が必要ですか



1

東京新聞 1997年8月18日

「地球温暖化・環境問題アンケート」集計結果より

2

「建設技術者のための環境教育プログラム策定」(清水建設株式会社)の成果の一部は、97年9月に開催された、第52回土木学会において発表されました。また、来春は環境教育学会をはじめ、関連学会に発表を予定しております。



「建設技術者のための環境教育プログラム策定」(清水建設株式会社) 野外プログラム実施風景

ハートウェアとは...

近年盛んに環境教育、体験学習といった言葉を耳にする。当社においても、「建設技術者のための環境教育プログラム策定」²(清水建設株式会社)、「野外体験学習施設を中核に据えた、地域おこしプログラムの策定」(高知県、某自治体)、国営みちのく杜の湖畔公園の利用プログラム作成³(財団法人 公園緑地管理財団)、その他各種講座、イベントなどへの人材の派遣、プログラムの提供など、これらに関する業務が次第に増え始めた。

私は、このような場における環境教育をよく寄席に例える。寄席には、話をする場所、つまり寄席その

ものが必要であり、古典であれ、新作であれ、そこで演じられるネタが必要である。そしてどんなにすぐれたネタがあろうとも、それをうまくはなす噺家がいなければならない。素人が話したところで、さほどおもしろいものではないのだ。ここで言う場所としての寄席は、環境教育に対応させるとビジターセンターであったり、博物館であったりするのだが、よく考えると、そのような場所でも、環境教育のプログラムは展開されている。例えば学校であり、公園であり、野山の一角であり...。ネタさえあれば、つまりプロ

グラムさえあればどこでも実施可能だ。しかし、この場合も、寄席同様にうまい噺家、つまりそのプログラムを運用する指導者が「心を持った人」である必要があるのだ。

我々は、場所としての寄席を通常ハードウェアと呼び、ネタに当たる部分をソフトウェアと呼んでいる。では噺家(=インタープリター)は...?

私達は、これをハートウェアと呼ぶことにしたい。これこそが心を持った人そのものでなければならないのだから。

(代表取締役会長・仁井雄治)

3

国営みちのく杜の湖畔公園の利用プログラムは、2部構成、12の主要プログラムとその他応用プログラムを紹介した。



パークレンジャーチャレンジカード(左)とその手引き(右)



パークレンジャーチャレンジカードより